

十字架称賛

第一朗読 民数記 21・4b-9
第二朗読 フィリピ[°] 2・6-11
福音朗読 ヨハネ 3・13-17

2025.9.14 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
イエズス会 アン助祭

共同体の皆さん、今日は、わたしたちと一緒に「十字架称賛」のミサを祝っています。キリストの十字架を礼拝する習慣は、実は5世紀ごろのエルサレム教会で始まったと言われています。そして、その後少しずつ広まり、東方教会や西方教会にも取り入れられ、典礼の中で重要な位置を占めるようになりました。この典礼を通して、教会ははっきりと「キリストの十字架への信仰」を表すことができます。教会にとって、キリストの十字架は決して恥ではなく、むしろ最大の誇りです。聖パウロも、ガラテヤの信徒への手紙の中でこう述べています。「このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません」（ガラテヤ 6・14）。

では、なぜわたしたちはキリストの十字架をこれほどまでに誇りに思うことができるのでしょうか。先日、説教の準備をしながらこの問いについて思い巡らせ、わたし自身の信仰生活を振り返ってみて、心に二つの意味（あるいは理由）が浮かび上がりました。

まず第一に、神がどれほど人間を、そしてわたしたち一人ひとりを愛しておられるのか——それは、キリストの十字架を通してこそ、わたしたちは本当の意味で理解することができるのだと思います。今日のヨハネ福音書には、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（ヨハネ 3・16）と記されています。この御言葉は、確かにわたしたちがよく知っているものですが、この点にもう一つ大切なポイントがあります。それは、「人の子が高く上げられるとき」（ヨハネ 3・14）、すなわち、十字架上でご自身の命をささげるときに、この愛がはっきりと示される、ということです。

また第二朗読であるフィリピの信徒への手紙にも、こう書かれていました。「キリストは、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで、従順でした」(フィリピ 2・8)。キリストはへりくだり、十字架にかけられて死ぬところまで、父である神に従われました。それを通して、神はご自分の限りない愛と救いを、すべての人に示してくださったのです。だからこそ、キリストの十字架は、わたしたちが誇りに思うにとどまらず、むしろ誇るべきものなのです。

もう一つ、十字架を誇る理由があります。それは、キリストの十字架が、わたしたちの生きる道そのものであるからです。先週の日曜日、年間第 23 主日のルカ福音書で、イエスはこう言われました。「自分の十字架の背負ってついてくる者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない」(ルカ 14・27)。つまり、キリストに従う者はみな、十字架の道を歩むように招かれているということです。そしてその道のほかに、弟子としての道はありません。では、「十字架の道」とは具体的にどんな生き方なのでしょうか。それは、イエスの生涯、特に十字架の出来事を見つめるとき、はっきりしてきます。十字架の道とは —— 自分を差し出すこと、与えること、奉仕すること、他者をゆるすこと、愛すること —— このように生きることです。

正直に言えば、わたし自身の信仰生活を振り返ってみても、こうした生き方を日々実践することは決して簡単ではありません。それでもなお、わたしたちには希望があります。なぜなら、イエス・キリストは十字架において世に勝利し、すべての人に救いと希望をもたらされたからです。だからこそ、わたしたちもイエスの死と復活の恵みにあずかりながら、十字架の道を歩むことができるのです。わたしたちは、神が一人ひとりにその力と導きを与えてくださっていると信じています。

このように、キリストの十字架は、神の愛のしるしであり、わたしたち生きる道でもあります。今日のこのミサの中で、まずはキリストの十字架を通して示された神の限りない愛と救いの恵みに、心から感謝をささげましょう。そして、イエスに倣って、十字架の道 —— つまり、人々に仕え、愛し、与える道を、わたしたち自身も歩むことができるよう、祈りましょう。アーメン。